日本の近現代文学に見られる老醜とその克服

木村東吉

一　はじめに

日本の近現代文学史を福祉文化史の視点から見ると何が見えるか。そんな漠然とした関心をもって資料を集めていて、『上野千鶴子が文学を社会学する』[1]にも出会い、介護文学の誕生といった言葉にも触れた。そうした作業の中でまず筆者に見えてきたことは、この百年余の間に書かれた文学作品において描かれた老醜が大きく変質していることであった。

日本が迎えた高齢化社会において老人問題は社会的広がりをもち、現在創作されている文学作品においても、老人文学が一つの潮流になっている。菅野昭正が『文学　一九九六』[2]の解説で、この点を指摘したのは一九九六年であった。かつては貧困や人の愚かさなどに老醜の要因を見ているものが多かったのだが、最近は加齢による生理的機能不全が注目され、これが誰にでも起こりうることと捉えられるに至っている。したがって、かつては傍観的に捉えていた視点が移動し、老いた親に未来の自己を見るところにきて、これを介護する立場の深刻さとともに、老醜克服の問題が、尊厳死とも密接につながってきているのである。

自立能力を失って周囲に適応できない人に対し、これを見る側の心理的許容範囲を超えると、人はそれを醜悪と見る。社会的適応不全は老人に限ったものではないが、老人の適応不全を老醜と呼んできた。原因を整理してみると、経済的要因によるものと、生理的要因によるものがあり、後者には肉体機能的なものと、精神的なものとがある。病気などで働く力を喪失した場合、経済的支柱を失った場合等の貧困を伴うことが多いことが予想されるが、実際は貧困や肉体的衰弱だけでは、ルポルタージュや作品の条件設定とはなりえても中心テーマにはなりにくい。また、これに耐え、あるいは克服する精神的な美を形成する要素ともなり得る。このため、文学作品では精神的適応不全が中心的なモティーフに取り上げられることが多いのだが、これには経済的・肉体的背景を伴っていない場合も当然ある。したがって、限定された内容になるが、ひとまず文学作品

二七頁

に現れる老醜の変化する様を歴史的にたどってみると、福祉文化史の一面に光を当てることにもなるであろう。

二　近代文学における老醜

近代文学において老醜を取り上げた最初の作品かどうか、筆者に断定する用意がないが、泉鏡花は早くから作品中に醜い老人を登場させている。しかも、明治期の作品では老醜の問題がしばしば貧困や病気の問題と重なって哀れな姿として現れているのだが、泉鏡花の『夜行巡査』[3]（一八九五年）では、年老いた貧しい車夫はむしろ同情されるべきものとされている。これに対して若い娘に介抱されている結婚式帰りの老人を登場させ、彼が兄嫁に横恋慕して嫉妬に苦しんだ返報を遺児の姪に向け、巡査に恋する彼女の恋心を一面であおりながら結婚を許さず、姪を苦しめることに生き甲斐を見いだしている人物であることを明らかにする。その上で、当の巡査が規則だとして前者を追い立て、後者が堀に落ちると救おうとして溺死し、この巡査を仁者とする新聞報道に対して、はたして仁者かと問うている。

ここに中心テーマではないが老人のゆがんだ性の問題が取り上げられている。これを個性の問題とだけ見ては、老いの問題が隠されてしまう。広津柳浪の『黒蜥蜴』[4]（一八九五年）にも、酒に身を持ち崩した舅が、孝行な養子の妻に繰り返し性的要求を迫り、離婚あるいは殺害の原因になっていることをほのめかす表現がある。いずれも特異な例のようで、これらの老人から家長としての権能を剥離してみれば、後に述べる老親介護の現代的問題と隣接していることが明らかになる。老人の変質的性欲への嫌悪が、老醜表現の一つのパターンとしてあったのであろうか。ここでは老人に家長としての権能が備わっているため、隠蔽された性犯罪や家庭内でのセクシャル・ハラスメントの問題となり、これを暴くことでセンセーショナルな性格を持たせている。

問題が倫理的側面から取り上げられ、旧来の硬直した家族倫理に疑問を投げかける形で取り上げられている例といえよう。

孤老の老醜を、社会的問題意識で中で捉えたのは、徳田秋声であった。彼は『二老婆』[5]（一九〇八年）において、伴侶に死別した二人の老婆に焦点を当てている。そのうちの一人お栄は、家主に家賃を未払いのまま、語り手に又貸ししている部屋代の他は売り食いで暮らしつつ、ただ「釜を磨くのと、火鉢の掃除をするのと、其からお化粧をするのと其がキチンキチンと決まつた一日の仕事で、奈何かすると、肉厚の大皺の寄つた顔に白粉を塗つて、厚い唇に紅まで差しゐる」という生活をしている。もう一人の老婆お幾は弱い身体で洗濯屋として働き、その日その日を暮らしている。お幾はお栄のことを「食はず貧楽」とくさし、お栄はお幾のことを「あんなに迄して、私や生きてゐやうとは思ひませんわね」と蔭で嗤っている。職業学校に通っている語り手の妻はこの争いを「熟にしても、今一歩踏外せば、乞食の境涯に落ちようとする、危い縁に辛うじて踏止まつてゐる」者の争いと見て笑っている。この隣家には「自用車まで抱込んだ某銀行の頭取」の新建の宅や格子戸造の「下谷邊の或紳士の妾の宅」があるのだが、彼女らとは「遂口を利いた事もない」とされている。

ある時お栄が酒屋の老人のもとに「茶呑友達のやうな、介抱人やうな」形で住み込むと、お幾は酒屋の老人の好色を言い立てるなどしていたが、ある夜井戸に飛び込む。しかし死にきれず、嘔吐物にまみれながら辛くも命を取り留めている。同じ日に「耳が遠くて目が悪い」というので暇を出されたお栄は、もとの家に引き返して縊死している。化粧に日を暮らす「変な婆さん」と、「大した技倆も

の」の老婆とを同列に対比しつつ、社会的底辺で窮死していく孤老を冷徹に見据えた作品である。

明治期においてもっとも悲惨な老人を描いたのは、真山青果かもしれない。彼の場合は、貧しさゆえの人間性のゆがみに注目している。『南小泉村』[6]（一九〇七年）では極貧にあえぐ東北農民の姿を村の診療所の代診の目から描いている。その最初に登場する黒瀬ろくの一家族では、稼ぎ手の息子が兵隊に出て今日の飯米にも追われる生活である。母親の老婆ろくは暗くむせる部屋に住み、化膿性肋膜炎を病んで熱があり、身体が腫れ、肋膜に水がたまっている。だが、治癒の見込みがはっきりしないなら水を抜くことすら勧めないで欲しいと医者に頼む夫、その夫や家族に内緒で自分だけの自由になる米や金をためていながら、医者を信じかねて治療を躊躇する老婆が描かれている。また家族に内緒で鶏卵を売った金が手に入ればすぐその金で酒を飲むという隣人も登場する。貧しいが故に希望もなく、自分一人の今の命をつなぎ止めるためには、家族すら信じ合えないことが、彼等の老醜をさらに悲惨なものにしている。

また、青果の『家鴨飼』[7]（一九〇八年）では、「息子の道楽と人に騙されて些と筋の悪るい證文に印を捺したのがもとで」家屋を失い妻に死なれ、娘は近くの曖昧宿に勤めて浮き名が絶えないという門左老爺が、書生の目から描かれている。門左老爺は財産を奪った商家の憐れみで貸し与えられた窪地の仮小屋に住み、家鴨を飼い、娘から生活費をもらって生計を立てている。隣人には尊大に振る舞い、家鴨を買いに来た書生にも病気の家鴨を押しつけようとしたりする。そこに電線を張る工事が始まり、家の立ち退きを迫られる。門左老爺は電線の危険性を理解できないこともあって、最後まで抵抗するが、警察には臆病で、交番巡査に説諭されて諦め、家鴨を小屋に入れる。夜になって一羽足りないと捜し回るが、それは娘を誘惑した工夫が盗んだものであることがほのめかされている。

この老人は社会変動の中で周囲からいいようにあしらわれつつ、僅かな所有物に執着して猜疑心を募らせ、娘に金をせびりながら辛うじて生きている。だが、電線工事に象徴される近代化の波によって更に追いつめられている。老醜の根底に愚かさと貧しさに起因する人間性のゆがみを捉えており、変動期に見られる社会的弱者の哀れさを、優越的視点から描いている作品である。

この時期の作品が捉えた老醜には、傍観的立場からこれをその人物の属性として捉えているところがある。したがって、老醜を抱え込んだ人物は、それを運命として生きることが強いられ、救いのないものになっている。

真山青果が描いた人々と類似した階層の人々を描いている大正期の作品では、宮本百合子の『貧しき人々の群』[8]（一九一六年）がある。ここでも貧しく虐げられた人々の息苦しい生活と、そうした生活を強いられている人々にありがちな人間性のゆがみも捉えている。併せて金をばらまくだけの慈善事業の無意味さが暴かれ、人道主義的立場に立った主人公の善意も次々と踏みにじられていく。ただ、貧しく生きる人々の資産家階級に対する反抗・厚顔・狡猾のみならず、畑の生産物の窃盗すら、主人公が辛抱強く許容的に接していくために、これらが彼等の逞しさとも見えてくる。

例えば狒狒婆さまと呼ばれる老婆は、白痴の孫を抱えてある農家の納屋に暮らしている。彼女の長男は善馬鹿と呼ばれ、村童にも馬鹿にされながら、農家を渡り歩いて日々の食にありつき、菰にくるまって寝る生活をしている。狒狒婆さまの孫はその善馬鹿の子で、十一歳だが言葉も知らず身体も五・六歳程度である。狒狒婆は他家の手伝いや洗濯などをして、三度の食事は皆どこかですませ、「自分の家へはただ眠るだけに帰る」生活である。『二老婆』のお幾の

後身とも言える人物である。主人公は「出来るだけ婆に用を云ひつけて、食事などもさせ、ちょいちょい古い着物や何かをやつた」のだが、「ひどく貧乏で、恥も外聞もない欲張り」で、地主の孫娘である主人公を少なからず悩ませる。それは次のように描かれている。

食べる物でも、膳にのせてやつたものばかりでなく、残り物があつたらどうせ腐るのだからくれろと、ぐんぐん持つて行く。そんなときに、もしやらないなどと云はうものなら、もうすつかり不機嫌になつてボンボンろくに挨拶もしないで帰つてしまふのである。新しい着物でも着てゐると、一つ一つ引つぱつてみないでは置かない。

そんなことがほんたうにたまらなくいやであつたけれども、私は貧しい者のうちに入つ行かうとしながら品振つてゐる自分を叱り叱りしてやうやう馴れるまでに堪へたのである。

ここでは老婆の礼節の欠如が、若い主人公を悩ませている。それは彼女が最初に老婆を援助しようと好意的に考えた時の許容範囲を超える要求が、老婆から出ているためである。周囲があらかじめ用意した許容範囲を越えたとき老醜が発生することを、ここでは如実に示している。従って努力して許容範囲を拡大すれば、馴れることが出来るものになる。真山青果が捉えた醜悪さに接しながら、自己の視点を変えようとしているのである。

問題が経済的要因と精神的要因を結びつける視点から取り上げられているところにも、この作品の特徴がある。秋声の視点と青果の視点が融合されているといえよう。

これらとは逆に、老人を取り巻く周囲のエゴイズムを暴いたのが、芥川龍之介の『玄鶴山房』[9]（一九二七年）である。この作品では中産階級の老人の孤独な死が描かれている。中心人物の玄鶴は、ゴム印の特許を得たことによって産を成し、昔の大藩の家老の娘という美貌の妻お鳥を持ち、娘のお鈴には知事などもつとめた政治家の次男で銀行家の重吉を婿としている。家には女中が置かれ、妻が「腰抜け」になったこともあって、玄鶴が病に伏せると夜の看護のために看護婦甲野が雇われている。しかし、家族には誰一人として玄鶴を本気で気遣う者がいない。重吉は帰宅すると儀礼的に玄鶴に声をかけるが部屋にはいることすら「不気味」だとしてしない。お鈴はお嬢様育ちで家事に疎く、お鳥の看護すら充分でない。看護婦の甲野がお鳥に手水をつかわせると、「これで人間並みに手が洗えます」と涙を流すありさまである。

このような状況で、すでに手切れ金を渡した昔の玄鶴の女中あがりの妾お芳が子どもを連れて看護の手伝いに来る。不自然な家庭だが、玄鶴は「お芳の泊つてゐる間は多少の慰めを受けた代りにお鳥の嫉妬や子供たちの喧嘩にしつきりない苦しみを感じ」ることになり、「お芳の去つた後は恐ろしい孤独を感じた上、長い彼の一生と向ひ合はない訣には行かなくな」る。ここで人生に充実感をもてなかった彼は、褌用に買って来させたさらしで自死をはかる。しかしその自死の試みすら孫に目撃されて、「やあ、お爺さんがあんなことをしてゐらあ」と囃されている。生きた屍同然の扱いがされているが、自死すら許されないのである。

にもかかわらず遺族は遺体を「一等」の竈で荼毘に付すことに固執し、結局一等の値段に値切られた「特等」の竈で荼毘に付されている。外聞だけを気にする遺族の計らいである。経済的には余裕のある階層だが、家族に惜しまれることのない死が、如何に孤独なものであるかを描いたものといえよう。老境に心身を安らうことが出来ず孤独に悶える姿が老醜と映るのだが、ここでは老人を取り巻く側の非人間性が抉りだされている。

三〇頁

三、現代文学における老醜

積極的に美しく死ぬことによって老人を取り巻く人間のエゴイズムを突きだし、逆説的に老醜を捉える視点そのものを相対化したのは、深沢七郎の『楢山節考』[10]（一九五六年）であった。この作品の舞台となった村では、「三日病んだらまんま炊」くと身持ちが悪いとされ、食料を盗んだことがばれると家中の食料を奪われる制裁を受け、更に盗まれることを予防するために一家全員が消される運命にある。このような状況にあって、老人は七十歳になったら老人を遺棄する山参りをすることになっている。曾孫の顔を見ることは恥であり、山に登ったとき雪が降ると運がいいとされている。ここでは貧困が貧富の差をつくるのではなく、村全体を覆う条件とされる。

こうした状況下において、根っこのおりんは自分の歯が老いてなお丈夫なことを恥じ、自分で石臼に歯を打ちつけて歯を折る。曾孫が生まれそうな気配を見ると七十歳になる直前に山に行くように息子の辰平に急がせ、山頂に着いたとき雪が降り出す。これに対し、銭屋の又やんは死を逃れようとすることで「馬鹿な奴」とみなされ、捨てられることに抵抗すると息子に雁字搦めに荒縄で縛られたうえ、谷底に蹴落とされている。老いてなお健康であること、生きようとすることが老醜とみなされているのである。

母親のおりんを山につれていって帰ってきた辰平は、昨夜までおりんが着ていた綿入れを孫のけさ吉が羽織り、おりんの細帯をけさ吉の若い妻松やんがしめているのを見る。老人が自ら棄老の山に赴くことを美化しつつ、世代間の利害を暴露する構造になっている。けさ吉と松やんの夫婦は「三十すぎてもおそくはねえぞ」と晩婚を良しとする村で、二十歳以前の結婚をしているが、あからさまに非難されることはない。ここにいたれば、かえって老醜を見る側のエゴイズムがあからさまにされる。『玄鶴山房』における家族内の問題が、村落共同体の次元にまで拡大された形である。

棄老伝説を扱った作品でも、田村喜代子の『蕨野行』[11]（一九九八）になると、棄てられた老人の被服・身体・性的行動について老醜と捉える視点が消え、むしろ飢饉のために間引きが一般的に行われている中で、庄屋の若い嫁が子を産むことの是非を悩む姿が描かれている。リアリティーの問題は別として、人間把握の角度が大きく転換されているのだが、この点は別に考えたい。

『楢山節考』と同じ問題を自己の内部において捉えたのが安岡章太郎の『海辺の光景』[12]（一九五九年）である。これは老耄性痴呆症による知的障害を発症した母親を精神病院に入れて一年後、危篤の報に接して帰郷し、臨終に立ち会うまでの九日間を描いた作品である。

一年前主人公が母親を欺いて病院に連れてきたとき、母親は「ふん、たうたう放りこまれることになったか」とつぶやき、自分が置かれた状況を正確に把握していた。主人公が医者に「母のやうな病気にかかってゐる者が全国でどれくらゐゐるものか」訊ねると、医者は「それがサッパリわからんのですよ。外国の場合だと、老人だらうと何だらうと、すぐに入院させるのですが、こちらは家族主義といふか、個人主義思想の徹底がたらんといふか、たいてひは家へ置いて外へ出さんやうにしますからね。ことに病気の性質から云つて年寄りが多いものですから。」と答えている。

この種の病人を精神病院へ入院させることと個人主義の関係を、医者はさらりと指摘している。指摘されて主人公は、この時「メマイをおぼえさせられるやうな困惑」に陥る。「何のための困惑であつたかはわからない」としつつ、「ただ、黄色いワニスと、白い壁と、緑色の窓枠とにかこまれた長い廊下にへだてられて、いま母親をその部屋へ一人のこしてきた緑色の扉が、無限にとほく、小さく

三一頁

なつて行くのを感じただけだ。……耳の底に、甘い、軽やかな、まるで楽器でも奏でるやうな声で『個人主義……、家族主義……』といつた言葉がひびくのを聞きながら」「目のまへの廊下が無限にながく延びて行くのを感じて、一瞬足をとめた」と、一年後に思い返している。

危篤の報に駆けつけた主人公は、九日間の付き添いの間も、もはや息子と母親に認められることはない。おしめ用の襤褸に包まれて病み衰えた母の死を見届けた後、主人公は一時開放された思いすら持つのだが、ちょうどその時、自己の内面の醜さを、干上がった海底の光景としてみている。そうした意識の揺れが、作品の末尾に次のように描かれている。

戸外の土を踏んだ瞬間、信太郎はふらふらと.メマイの起りさうな気がした。頭の真上からイキナリ強烈な日光が照りつけて、眼をつむると、こんどは足もとが揺らぐやうにおもつた。やはり、かなり疲れてゐるからにちがひない。それに、ここ一週間以上、八日か、九日の間に、一度日除けを買ひに出掛けたことをのけると、日中こんなふうに外へ出たことはまつたくなかつたせゐでもあるだらう。運動場へ出たのは、いつも夕暮れどきか、夜だつた。

――九日間、そのあひだ一体、自分は何をしてゐたのだらう。あの甘酸つぱい臭ひのする部屋に一体、何のつもりで閉ぢこもつてゐたのだらう。たとひ九日間でも、そのあひだ母親と同じ場所に住んでみることで、せめてもの償ひにするつもりだつたのだらうか？　償ひといふにはあまりにお手軽だとしても、しかしそれなら一体、何のための償ひなのだらう、何を償はうとしてゐたのだらう？　そもそも母親のために償ひをつけるといふ考へは馬鹿げたことではないか、息子はその母親の子供であるといふだけですでに充分償つてゐるのではないだらうか？　母親はその息子を持つたことで償ひ、息子はその母親の子であることで償ふ。彼等の間で何が行はれようと、どんなことを起さうと、彼等の間だけですべてのことは片が附いてしまふ。外側のものからはとやかく云はれることは何もないではないか？

信太郎は、ぼんやりそんな考へにふけりながら運動場を、足の向く方へ歩いてゐた。――要するに、すべてのことは終つてしまつた――といふ気持から、いまはかうやつて誰に遠慮も気兼ねもなく、病室の分厚い壁をくりぬいた窓から眺めた"風景"の中を自由に歩きまはれることが、たとへやうもなく愉しかつた。頭の真上から照りつける日射しも、いまはもう苦痛ではなかつた。着衣の一枚一枚、体のすみずみまで染みついた陰気な臭ひを太陽の熱で焼きはらひたい。海の風で吹きとばしたい……。そのとき、いつか海辺を石垣ぞひに歩いてゐた信太郎は、眼の前にひろがる光景にある衝撃をうけて足を止めた。

岬に抱かれ、ポッカリと童話風の島を浮べたその風景は、すでに見慣れたものだつた。が、いま彼が足をとめたのは、波もない湖水よりなだらかな海面に、幾百本ともしれぬ杙が黒ぐろと、見わたすかぎり眼の前いつぱいに突き立つてゐたからだ。……一瞬、すべての風物は動きを止めた。頭上に照りかがやいてゐた日は黄色いまだらなシミを、あちこちになすりつけてゐるだけだつた。風は落ちて、潮の香りは消え失せ、あらゆるものが、いま海底から浮び上つた異様な光景のまへに、一挙に干上つて見えた。歯を立てた櫛のやうな、墓標のやうな、杙の列をながめながら彼は、たしかに一つの"死"が自分の手の中に捉へられたのをみた。

主人公が母の病室から出ると、ここでもメマイに襲われている。

三二頁

その原因について、まず疲れであるとか、日向に慣れていないとかといった生理的な説明が加えられ、次いで、その原因となった九日間の自分の行為についての解釈が加えられる。その最初の解釈は、「償い」である。これは母を精神病院に入院させたという自責の思いから来ているに違いない。だがこれを「償ひといふにはあまりにお手軽だ」とも感じるがゆえにそのまま受け入れがたい主人公は、親子間の問題を一般的宿命の中で自己合理化し、「外側のものからはとやかく云はれることは何もないではないか？」としている。内部に生まれた自然な感覚を、外部から規制してくる倫理観とすり替えたうえで、一括処理しているのである。

そこで、彼はすべてが終わったという認識の中で、自己を開放する。だが、その直後に、主人公は「一つの“死”」を見る。ここで主人公がその手に捉えた「一つの“死”」とは、他ならぬ「家族主義」に内包されていた人間性の“死”に違いない。病み衰えた母親の末期を息子の視点から捉えている点でも、この作品は画期的である。

『楢山節考』と『海辺の光景』は互いに無縁の所で書かれた作品だが、いずれも親を棄てるという同一のモティーフを扱って、同時代の思想状況を裏腹な形で照射しているのは興味深い。ここ至っては、対象に老醜を見ることが、実は社会や自己の内面に隠蔽された非人間性の反映であることが、母と子の関係から明らかにされているのである。

一九七〇年代にはいると、『海辺の光景』における親の介護を家族が引き受け、さらに深刻な老醜を直視した作品が現れる。有吉佐和子の『恍惚の人』[13]（一九七二年）がそれである。この作品では、生涯夫に献身的だった妻が脳内出血で突然死んだ日に、夫の茂造が痴呆状態にあることを家族に発見され、以後彼が記憶喪失、徘徊、妄想、失禁、幼児返り、人格欠損を経て死ぬまでの約十ヵ月が描かれる。健康だったときの茂造が家族に愛情を注いだこともなく、家族から愛されていた訳でもない。

介護する世代の長男信利が会社の次長の位置にあり、法律事務所に勤める妻昭子と共稼ぎ家庭で経済的にゆとりがあり、かつ昭子が超人的な体力と聡明さと忍耐強さと楽天的信仰を備え、受験期にある一人子の敏が素直で成績がよく、志望校への進学に不安がなく、茂造の痴呆に凶暴性が無いという好条件が揃っている。加えて介護の期間が比較的短いこともある。クールな敏の視点の挿入によって、昭子が茂造を動物次元で捉えているため、彼が夜中に昭子の上にしばしば馬乗りになってきても、これを昭子が決定的な嫌悪をもって見ていない。しかし、これも痴呆の程度によっては広津柳浪の『黒蜥蜴』と隣接した問題になるはずで、通常の女性に許容できるものではない。

『恍惚の人』は何か一つ条件が欠けても、家族ぐるみの悲劇となる要素を持ったガラス細工のような危うさを持つ作品であるが、痴呆老人の老醜が作品上でここまで暴かれたのはおそらくこれが最初であろう。しかも、次世代の介護者が自分の未来に同じ姿を想定するために、問題を深く受けとめている。しかも昭子の楽天的信仰とは、自分が茂造の介護を成し遂げたら、自分も同様の介護を受けられるというものだが、これを一般化するのが楽観に過ぎることは、学生結婚をしている間借り人の山岸夫妻の生活振りによって暗示されている。孫世代の夫婦においては、家事労働を妻が担うという前提がすでに無い。しかも敏からは、「パパも、ママも、こんなに長生きしないでね」と言われている。『海辺の光景』における「一つの”死”」は、若者の世代にすでに自明のことなのである。

茂造の老醜は、彼自身の努力によって回避する方法がなく、誰にでも起きる可能性があり、文明病とされている。近代文学において

三三頁

傍観的に捉えられてきた老醜とは、明らかに性格を異にしている。次世代は、茂造の幸福が茂蔵自身に自覚されている確かな証拠はないのだが、そこに自己の未来を投影するから介護に力を尽くしている。しかし、昭子が体力的に限界を感じ破局が迫ったとき、夫信利は手助けするのではなく、「殺せ」と口走る。ここに男の無責任を見るのも一つの解釈だが、併せて猛烈社員を良しとした時代の会社勤めのエリートサラリーマンの余裕の無さも見えてくる。ここにもやはり「一つの"死"」はあるのである。

昭子は夫を責めるのではなく、自分が介護し抜く覚悟をかためている。ここに至れば、昭子の営為は、彼女自身の人間性を自己確認するためのものであったという他はない。ただし、昭子の考え方と行為は、彼女自身の人生上の価値ある成果だが、「家族主義」における嫁の責務ように捉えられてしまっている。しかし、これはもはや誰にでも求められるものではなく、彼女一人が背負った介護負担も、彼女だけで背負うべきであるとはいえない。ここにこの作品の構造的な脆弱さがある。

ただし、一つの光明もある。山岸夫妻が、アルバイトのためであれば茂造のためにやさしくできるとし、おむつの交換も肉親から特に恐縮されるようなことではないとしているのをみて、信利が「それが新しい倫理の基本になるのかな」といっている。老醜も人間共通の生理現象の一つとなれば、それへの対処も、金銭に換算される労働となっていくことをこれは示唆している。「家族主義」のもとで、近隣への羞恥感から隠蔽されたまま遺棄に近い待遇を受けたであろう多くの痴呆老人を思うなら、批判は当たらない。『海辺の光景』における「個人主義」に立つ、新たな展開が予見されているし、時代は確実にそうした方向に動いてきた。

『恍惚の人』には、観念小説風のご都合主義が目立つのだが、佐江衆一の『黄落』[14]（一九九五年）では、問題を私小説風のリアルさで捉えつつ、『恍惚の人』が残した問題点を、二つの方向に展開している。社会的環境も大きく変化して、希望すればデイサービス、ショートステイサービスも受けられるようになっている。『黄落』の語り手が作家であることにもよるが、両親の介護を妻一人に任せてもいない。

『黄落』の母親佐藤キヌは転倒して骨折したのきっかけにまだらぼけが始まり、やがて人格欠損が進行して夫の首を絞めるような凶暴性も現れる。抑制が取れるにつれて望まぬ結婚であったためか、野良犬を追うように夫をシッシッと追うようになり、意識の世界では娘に還ると同時に、自分の状態にも気づいているのか、自ら絶食し、「顔色はいっそう透明さを増し、蒼白というより蝋のようで、さらに皺も消え」た姿で死を迎えている。

自ら食を断ち、周囲が彼女の意志に反する処置をしないという形で協力している点では上野千鶴子が指摘するとおり、『楢山節考』の根っこのおりんの死と類似した面も確かにある。しかし、同じでは決してない。おりんは環境が求める倫理に従ったのだが、キヌの場合には自身の人格崩壊を自ら拒否している面もあるからである。ここには尊厳死の問題が提出されている。更に、キヌのこのような生き方は、語り手の妻蕗子に共感され、共倒れも覚悟したかと思わせる介護によって、放置あるいは遺棄から守られている。

しかも、蕗子のキヌへの奉仕は、嫁の義務ではなく、心底において夫への愛情であり、同時にこれが夫に認められ、社会的に明らかにされることを期待した自己証明のための営みと自覚されている。これが人生上の価値と自覚されているからこそ、夫が蕗子を介護から開放するために離婚を申し出たり、キヌの葬儀の場で夫が蕗子への謝辞を述べないこと（家族内に隠蔽されること）は、蕗子にとって自分をないがしろにすることなのである。

三四頁

このようなキヌに対比されているのが、老怪と揶揄的に名付けられた父親定吉である。家庭生活で自立していない定吉は精神的に不安定になるのであろうか。介護者蕗子への故無き尊大さや素直に感謝できない性格のゆがみも、貧困のためではない。金への執着、九十四歳にいたっての恋やセクシャルハラスメントに関する無感覚、猜疑心、とぼけ、都合耳、いずれも老いの寂しさと卑屈さと屈折した尊大さ、甘えを反映しているようである。生活不安も無く、肉体が健康であることが、必ずしも老後の幸福を保障しないことを、これらは示している。こうした定吉の精神的生活習慣病とでもいうべきふるまいも、他人として職業としてなら難なく対処されている。これを自身の未来図と見る息子の立場の語り手の目からみると、容認できない老醜と映る。ここにはむしろ『恍惚の人』における敏の目が昭子を救ったように、老いた親の介護にあたっては、むしろ親離れした乾いた視点が必要なのかもしれない。

四　むすびに

以上、近現代小説に描かれた老醜に注目し、その変質過程を粗い目で確認してきたに過ぎない。

老人の経済的・肉体的・精神的適応不全も、かつてはこれを傍観的に捉え、当人の運命的属性と見られてきた。しかし、特に一九七〇年代以降、これが誰にでも起こりうる自然現象で文明病と捉え直されるにいたって、親の介護をする次世代の共通の問題となっている。こうしたこともあって、かつては「家族主義」によって家庭内に隠蔽されてきた部分が、「個人主義」の定着もともなって、公的機関によって職業的に対応されるものになってきた。

その一方で、『黄落』では老醜を拒否する尊厳死のあり方が提起されている。しかし、この尊厳死が真に自発的なものであったとしても、そこに献身的介護が伴わず、金銭に換算された労働のみで介護されるなら、新しい『玄鶴山房』になるであろうし、周囲から暗黙の要求があるとすれば、『楢山節考』の再現となる。その意味では、真の尊厳死には、これを支える「家族主義」的理解と献身的介護が不可欠といえる。

反面、老醜に居直る老人の介護の場合は、「家族主義」的理解がかえって老醜を増幅し、家族共倒れの悲劇をはらむ。ここにはむしろ、人間の老いを冷静に捉える視点を導入し、職業的に対応する方が問題を円滑に処理できるところがある。

いずれにしても、理想的方法はないが、森鴎外が『高瀬舟』（一九一六年）においてユータナジーの問題を提起して以来八〇年余が過ぎ、今日では、これが尊厳死の問題となって、新たな展開を見せているように思われる。

註

（1）上野千鶴子著　朝日新聞社　二〇〇〇年

（2）菅野昭正『文学　一九九六』日本文芸家協会編　講談社

（3）初出は「文芸倶楽部　第四編」（博文館　一八九五年）本稿は『鏡花全集』第一巻（岩波書店　一九七三年）によった。

（4）初出は「文芸倶楽部　第五編」（博文館　一八九五年）本稿は『講談社版日本現代文学全集』11巻（講談社　一九六八年）によった。

（5）初出は「中央公論」（中央公論社　一九〇八年四月）本稿は『秋聲全集』第二巻（臨川書店　一九七四年）によった。

（6）初出は「新潮」（新潮社　一九〇七年五月）本稿は『明治文学全集』70巻（筑摩書房　一九七三年）によった。

（7）初出は「早稲田文学」（金尾文淵堂　一九〇八年四月）本稿は『明治文学全集』70巻（筑摩書房　一九七三年）によった。

三五頁

（8）初出は中條百合子の名で一九一六年九月「中央公論」、初版一九一七年五月玄文社刊。本稿は『宮本百合子全集』（新日本出版一九七九年四月）によった。
（9）初出は一九二七年一～二月「中央公論」、本稿は『芥川龍之介全集』8巻（岩波書店刊）によった。
（10）初出は一九五六年一一月「文学界」本稿は『深沢七郎選集』2巻（大和書房　一九六八年刊）によった。
（11）初出は（文芸春秋社　一九九四年刊）
（12）初出は一九五九年一一～一二月「文学界」本稿は『安岡章太郎全集』1（講談社　一九七一年）によった。なお、この作品については江藤淳「成熟と喪失」に詳細な論考がある。
（13）初出は『純文学書き下ろし特別作品　恍惚の人』（新潮社一九七二年六月刊）本稿はこれによった。
（14）初出は一九九五年四月「新潮」。本稿はこれによった。

三六頁